ラジオ
1197

AM
STEREO
RADIO
フルタイムステレオ
（本局のみ）

感動のシーンが見えてくる。

なんでもあり。
41st
RKK
熊本放送

Kumamoto Broadcasting co,Ltd.,
30 Yamasaki-machi Kumamoto-city
Japan 860 Phone 096-328-5511

第36回
熊本県芸術祭参加

ベートーヴェン

第九

第12回

平成６年12月25日(日)午後６時30分
熊本県立劇場コンサートホール
主催／熊本県民第九の会・熊本県文化協会
助成／熊本県・(財)熊本県立劇場

熊本県知事
福 島 譲 二

第12回ベートーヴェン「第九」演奏会の開催を心からお喜び申し上げます。

県立劇場開館の年に誕生したこの演奏会は、県民の皆さんの手で作りあげ、育ててこられたもので、一年を振り返るこの季節に、欠かすことのできない催しとして、県民の間にすっかり定着した感があります。

本県では、豊かな生活環境の中で、日常的にゆとりと充実感のある文化活動ができるように、様々な施策に取り組んでいるところです。しかし、地域文化を支えるのは、県民一人ひとりの芸術文化への熱意だと思います。その意味からも、この演奏会の開催にあたって御尽力いただいている実行委員会の皆様をはじめとした関係者の方々には、深く敬意を表する次第です。

今年も、４人のソリストと300人の県民大合唱団による歓喜の歌が、ホールいっぱいに響くことでしょう。出演者の皆様が日頃の練習の成果を十分に発揮されますことを期待しますとともに、演奏会の御盛会を祈念いたします。

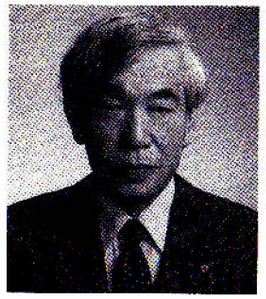
熊本県立劇場館長
鈴 木 健 二

今夜、第九シンフォニーを演奏し合唱されるために、たくさんの方が熊本県立劇場の舞台に立たれますが、その情景を想像しますと、昨年の４月25日、３年がかりで上演した「こころコンサート」のフィナーレを想い出します。お客様も共に歌われての４千人の巨大コーラスでした。その中には、この一年間、手を取りあい心を結びあわせて一生懸命練習してきた700人のハンディを体に持つ方達の姿がありました。世界で初めての試みであったこの音楽会は人間の感動がすべてでした。

ベートーヴェンも「第九」を作曲した時には、聴覚を完全に失っていたのです。彼の人間の常識と能力を超えたエネルギーが、永遠の歌声を地球上に響かせているのでしょう。

「ハンディを持つ方がこんなに素晴らしい生きる力を内に秘めているとは……」

あの時参加されたすべての人々の感想でした。ベートーヴェンと熊本に住む私達のつながりの不思議さを、いましみじみと思います。



熊本県文化協会会長
三 浦 洋 一

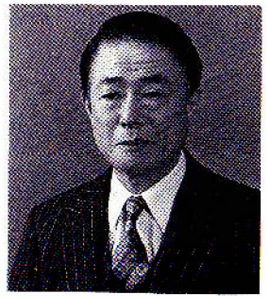
いよいよ県民第九の会の演奏の季節を迎えました。今日に具え猛暑の頃から万全の準備をすすめてこられた指導者と団員の皆さんに心からの敬意を捧げます。

この秋の第七回県民文化祭は人吉、球磨の地で繰りひろげられました。人吉は犬童球渓を生んだ土地柄でもあって、学生や市民の合唱団の素晴らしい歌声を聞くことができました。多良木町でひらかれたフィナーレの行事でも、青少年やコーラスグル　プの合唱が会場を圧して響きわたりました。

県民第九の会はこうした合唱団と違って第九を歌うためにのみ応募し、習練を重ねてこられました。

第九の会のみを志願する人びとが多いのは第九の格別な魅力に取りつかれ、あの圧倒的な歌声のなかでオーケストラの一員としての役割を演じることに生き甲斐を感じておられるからだと思います。

熊響の演奏と団員各位の歌声が1994年度の合唱公演のグランドフィナーレになります。県民の皆さんとともに大きな声援と拍手を贈ります。



熊本県民第九の会実行委員長
下 田 宰 城

今年もまた、熊本県・県立劇場並びに県文化協会のご助力を頂き、第12回「第九」演奏会を開催できますことを心から感謝申し上げます。

毎年この時期に全国各地で200回を超える第九演奏会が行われておりますが、その殆どはプロのオーケストラと地元合唱団による公演であります。熊本のようにオーケストラも合唱団もアマチュアというものは数少なく、私たちはそれを誇りとし大切にしてきました。

しかし、年末恒例の、そして単に12回という回を重ねることに意義を求めるのでなく、アマチュアにして如何に芸術的に高い第九の演奏で皆様に感動して頂けるかと努力を重ねてきました。

合唱団の公募には、県下全域から毎年300名を超える応募がありますが、大部分の人が音楽関係以外の人たちです。今年も15歳から85歳までの年齢も職業も様ざまな人たちが熱心に練習に取り組みステージに立ちます。

指揮者金洪才氏の卓越したご指導と、素晴しい四名のソリストの方々のご助力により、感動的な「歓喜の歌」を歌い上げることができることを願っております。未熟なところはご寛容頂き、皆様方の温かいご声援をよろしくお願い申し上げます。

本日のご来場誠に有り難うございます。

出　演
PERFORMANCE

指　揮　金　洪　才

独　唱
ソプラノ　岩　永　圭　子
メゾ・ソプラノ　妻　鳥　純　子
テノール　饗　庭　知　昭
バリトン　勝　部　　太

合　唱　熊本県民第九の会合唱団
合唱指揮　林原隆治
工藤勇壱
ピアノ　古閑恵美
真田真澄

管弦楽　熊　本　交　響　楽　団

平成５年12月23日〈第11回熊本県民第九の会演奏会（指揮＝荒谷俊治）〉から

指揮者のプロフィール
CONDUCTOR;PROFILE

指　揮　**金　洪才**（キム ホン ジェ）

1954年生まれ。桐朋学園大学で指揮を小澤征爾、秋山和慶、故森正の各氏に師事。

1978年３月、東京シティ・フィル特別演奏会でデビュー。

1978年12月、桐朋学園オーケストラ第49回定期演奏会で指揮。

1979年９月、第14回東京国際指揮コンクールで第２位と、初めての特別賞（斎藤秀雄賞）受賞。

1980年６月、テレビ番組「オーケストラがやってきた」（新日本フィル他）専属指揮者に選ばれ、1981年１月にはＮＴＶ系「私の音楽会」の専属指揮者として読売日本交響楽団も指揮。

1981年４月、東京シティ・フィルの指揮者に就任。

1984年４月、名古屋フィルハーモニー交響楽団、1987年４月、京都市交響楽団の指揮者を歴任の傍ら、全国主要オーケストラを客演指揮し、内外の著名なソリストとも協演してその優れた音楽性と鮮やかな指揮は好評を博してきた。

1989年よりベルリンにおいて著名な作曲家ユン・イサン氏の下で研鑽を積む。1992年９月には、コリアン交響楽団を指揮して、ニューヨーク・カーネギーホールでアメリカデビューを果し、成功をおさめた。

独唱者のプロフィール
SOLOIST;PROFILE

岩永　圭子（いわなが・けいこ）
ソプラノ

武蔵野音楽大学卒業。同大学院修了。1978年、第25回文化放送賞受賞。1979年、82年、日本音楽コンクール入選。本格的なリリコ・スピントの安定した歌唱で、将来を嘱望されている。武蔵野音大オペラ「オルフェオ」のムーゼでデビューし、続いて「コシ・ファン・トゥッテ」のフィオルディリージに出演。1982年にオペラ研修所第3期生を修了し、その秋、日生劇場で「蝶々夫人」のタイトル・ロールをのびやかな声で、「シモン・ボッカネグラ」（日本人初演）のアメリア役で好評を博した。二期会オペラ・デビューは「運命の力」のレオノーラ、1991年、二期会40周年記念公演「神々の黄昏」では、ブリュンヒルデで絶賛された。

二期会会員

妻鳥　純子（めんどり・すみこ）
メゾ・ソプラノ

東京芸術大学卒業。同大学院修了。
1973年第42回毎日音楽コンクール第三位入賞。
翌74年、海外国際コンクール派遣代表者決定審査会で特別表彰を受ける。
75年から77年までミュンヘン州立音楽大学へ留学。
78年、79年と文化庁移動芸術祭公園「カルメン」でメルセデスを演じ、20回以上のステージは好評を博す。
80年には同役で二期会オペラデビューを飾り、86年「ワルキューレ」に出演。
84年、91年の「リゴレット」にはジョヴァンナ役で出演する他、ミュージカルでも、92年東宝「サウンド　オブ　ミュージック」へ出演している。
またコンサートでは、マーラー「第二番」やモーツァルト「レクイエム」等のソリストとして実力を認められている。
その歌唱力には定評があり、オペラ、リサイタル、放送等で活躍を続けている。　二期会会員

饗場　知昭（あえば・ともあき）
テノール

国立音楽大学卒業。東京芸術大学大学院オペラ科修了。柴田睦陸、ニコラ・ルッチに師事。
1970年大学2年在学中に日伊声楽コンクール第2位入賞。1972年、73年日本音楽コンクール入選。在学中より注目を集め、1975年には芸大定期公演オペラ「ラ・ボエーム」のロドルフォを歌い、オペラデビューを飾る。1976年アポロ・オペラ劇場のオーディションに合格し、プッチーニ「椿姫」のアルフレードで出演し好評を得る。また、1978年秋から79年にかけ文化庁派遣芸術家在外研究員に選ばれ、ミラノに留学しカンポガリアーニに師事。帰国後も度々のリサイタルで好評を博した。以来、オペラ歌手として数多くのオペラに出演するのみならず、宗教曲やベートーヴェンの第九交響曲のソリストとしても内外のオーケストラや著名な指揮者とも数多く共演するなど、コンサート歌手としても独自の地位を築いている。
本邦では、数少ない本格的テノールとして、その歌唱と高い音楽性には定評がある。

京都教育大学音楽科助教授　　二期会会員

勝部　　太（かつべ・ふとる）
バリトン

福岡教育大学英語科卒業。東京芸術大学大学院声楽科修了。オペラ研究所第一期生修了。1978年10月文化庁派遣芸術家在外研究員としてミュンヘンに留学。中山禎一氏に師事。
第45回日本音楽コンクール第一位。第7回、第19回ジロー・オペラ賞受賞。1991年第一回出光音楽賞受賞。
1977年労音主催公演ビゼー「カルメン」のエスカミーリョでデビュー。二期会公演「蝶々夫人」のシャープレスで一躍注目を浴び、その後数多くのオペラに出演のほか、コンサートでは、バッハの「ロ短調ミサ」「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」等の宗教曲をはじめ、ベートーヴェンの第九交響曲等のソリストとしても内外のオーケストラや著名な指揮者と共演し、常に好評を得ている。更に、ドイツリートの演奏者としてもその実力は大いに認められており、これまでにリサイタルを度々行い喝采を博している。

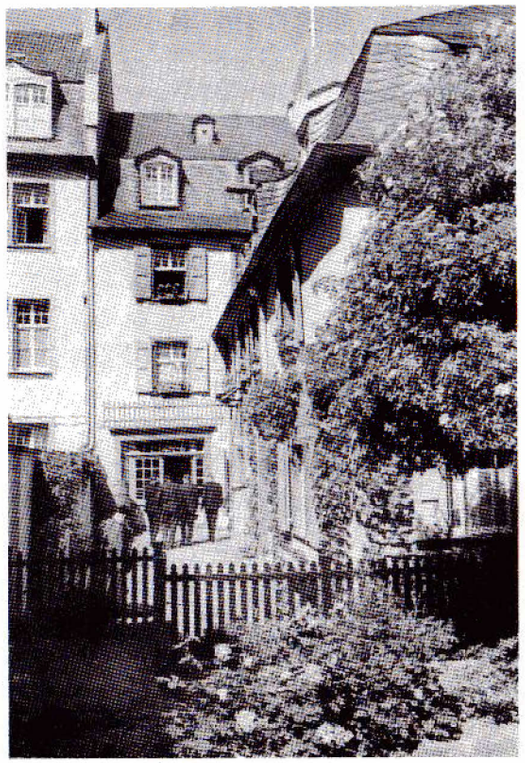
東邦音楽総合芸術研究所助教授
東京芸術大学講師　二期会会員

プログラム
PROGRAM

1．「エグモント」序曲　作品84
ベートーヴェン

2．交響曲第9番二短調作品125「合唱付き」
ベートーヴェン

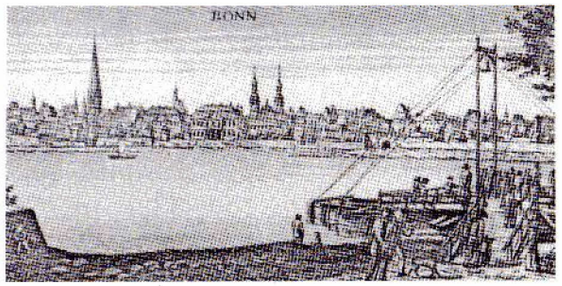
第1楽章　Allegro ma non troppo, un poco maestoso
第2楽章　Molto vivace
第3楽章　Adagio molto e cantabile
第4楽章　Finale


ベートーヴェンの生家（ボン）

ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツのボンで生まれた。1970年にはベートーヴェンの生誕200年を記念した様々な催しが全世界で行われた。

ボンで行われた“第九”の演奏会には日本からもある大学の合唱団が参加した。その演奏会の模様がラジオで中継されると、ボン中の人々は自分の家のラジオのボリュームを一ぱいに上げて、窓辺に外へ向ってそのラジオを置いたという。

ボン中にベートーヴェンの“第九”が鳴り響く様子を思い浮かべると、実に壮観で感動的であったに違いない。同時に、ボンの人々のベートーヴェンを誇りに思う気持と愛する気持が手にとるようにわかる。



ライン河の埠場から眺める対岸のボン市全景　1800年頃

歌詞対訳
PARALLEL VERSION

■シラー＝《歓喜に寄す》
対訳＝大宮真琴

O Freunde, nicht diese Töne! sondern lasst uns angenehmere anstimmen, und freudenvollere.

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium.
Wir betreten feuer-trunken,
Himmlische, dein Heiligtum!
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt,

Wem der grosse Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja, Wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend sich aus diesem Bund!

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund. geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

Seid umschlungen Millionen!
Diesen Kuss der ganzen Welt!
Brüder über'm Sternenzelt
Muss ein lieber Vater wohnen.
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such'ihn über'm Sternenzelt!
Über Sternen muss er wohnen.

バリトン独唱

おお、友よ、この調べではなく、
さらに快い、さらに歓びに満ちた調べを
ともに歌おう！

バリトン独唱・合唱

①歓びよ、神々のうるわしい輝きよ！
楽園の娘らよ！
われらみな、感動に酔い、
天の高みの神殿に踏み入ろう！
②この世に厳しく引き離された者らを、
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。
御身の優しい翼の憩うところ、
すべての者らは、同朋（はらから）となる。

四重唱・合唱

③大いなる天の賜物をうけた者らよ、
真空の友情をかち得た者らよ、
女の優しい愛を得た者らよ、
歓びの歌を、ともに歌え！
④しかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも
地上の友と呼べる者を持つことができるならば！
だが、それさえ持つことのできなかった者は、
涙しつつ、足音をしのばせ、立ち去るがよい！

四重唱・合唱

⑤すべてこの世に在るものら、
自然の胸から歓びを飲み、
すべての善人も、すべての悪人も、
歓びの薔薇の小径を行く。
⑥歓びは、われらに、口づけと葡萄酒と、
そして、死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、
天使ケルピムは、神の御前に立つ。

テノール独唱・男声合唱

⑦歓びよ、歓びよ、神の太陽たちが、
壮大な天の軌道をたのしく飛びかうように、
⑧同朋（はらから）よ、おのれの道をすすめ、
歓びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

合　　唱

⑨たがいに手をとり合おう、億万の人々よ！
この口づけを、全世界にあたえよう！
同朋（はらから）よ、星のかなたには、
愛する一人の御父が住み給うのだ。
⑩ひれ伏して祈るか？　億万の人々よ。
創り主を心に感ずるか？　世界の民よ。
星空のかなたに、主をさがし求めよう！
星たちのうえに、主は住み給うのだ！

1．「エグモント」序曲　作品84
ベートーヴェン

ラモラル・エグモントは史上に実在した人物である。1522年の11月22日に生まれ、1568年の6月5日に処刑されたオランダの貴族出身の軍人であり、政治家である。オランダにおける新教の普及と、ネーデルランドの独立をはかり、捕らえられて処刑された。文豪ゲーテは、この史実をもとにして、エグモントを主人公にして悲劇を書いた。あらすじは次のようになっている。エグモント伯は独立運動の指導者として登場するが、捕らえられて死刑の宣告を受ける。愛人クレーヒェンは、必死になってエグモントを救おうとするが、その力およばず自ら毒をあおいで死ぬ。エグモントが断頭台に引き出される寸前、クレーヒェンの幻影が現れて彼を祝福し、エグモントは力強い足取りで刑場へと向かう。

ウィーンの宮廷劇場の支配人ヨーゼフ・ハルトルはウィーンでの上演に際し、その音楽の作曲をベートーヴェンに依頼した。それを受けてベートーヴェンは、1809年の暮れから翌年にかけて、序曲を含む10曲からなるこの「エグモント」のための劇音楽を作曲した。

序曲は、独立してよく演奏されるもので、序奏をもったソナタ形式によって書かれている。その序奏部では、弦楽器群が重々しく、しかも決然とした動機を呈示する。これを木管がやさしく受けると、第1ヴァイオリンが小さな弧を描く新しい動機を呈示し、これに木管も加わるが、不安定な気持ちを残したまま曲はアレグロの主部へと入って行く。

主部の主要主題はチェロによって奏される。これは雄大で悲壮なエグモント伯の性格が滲み出ているようである。副主題は弦楽器群の強奏によって奏され、これを木管がやさしく受けるもので、序奏部の主題から生まれたものである。

展開部では、管楽器群が主になって主要主題を断片的に変形させた後、規則通りに再現部を経て曲は、終結部へと進む。ここでは、前の部分と気分はがらり変わり、第1ヴァイオリンがまことに伸びやかな動機を誘導動機として呈示し、これがクレッシェンドされて膨れ上がり、ついに新しい勝利の主題が現れる。そして、これが壮大なクライマックスへと導かれる。

2．交響曲第9番 二短調作品125「合唱付き」
ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に、九番目の交響曲に着手した。

1793年に、ボンのフィッシェニヒは、シラー夫人に手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いっきょに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいだいて、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大なる精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルントナートア劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、くい違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終ったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びせた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

〔第一楽章〕 Allegro ma non troppo, un poco maestoso

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度（第三音がない）の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモティーフが圧縮され、第1主題が澎湃（ほうはい）として湧きおこる巨大な塊のごとく聳然（しょうぜん）たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかって、このような主題の出現を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異って、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気分をもち、ときどき第1主題の部分をまじえながら展開部へとつづく。そしてその劇的壮大さは再現部における第1主題への壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワーグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びをかち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

〔第二楽章〕 Molto vivace

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考えうる限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果すことにもなるのである。

ワーグナーは「激しい喜びが、この第二楽章のはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々は入り、そこで陶酔や麻酔へと駆りたてられるからである……」と言っている。

〔第三楽章〕 Adagio molto e cantabile

讃歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴するような明るく美しい第二主題、この両主題にもとづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中での一つの頂点であり、ワーグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱（ゆううつ）な感覚へと溶けさせて行くことか、思い出がつとに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのように思われる…」といっている。

〔第四楽章〕 Finale

第1呈示部＝まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの歓ばしい旋律が現われる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返しながら全合奏に至る。

第2呈示部＝この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめる。そして男声合唱が、力強く歌いくわわる。

再現部＝やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組合わされて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中の一つのクライマックスを形づくる。

コーダ＝曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかぎりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストーソとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

「熊本県民第九の会」実行委員会

顧問	有馬俊一	委員	神田一伸
委員長	下田宰城		草刈秀克
			草刈秀士
			田北洋康
			黒葛原　潔
			林原隆治
			本山　洋
			山崎崇伸

「熊本県民第九の会」合唱団 CHORUS

インスペクター 草刈秀士

Soprano
〈ソプラノ〉

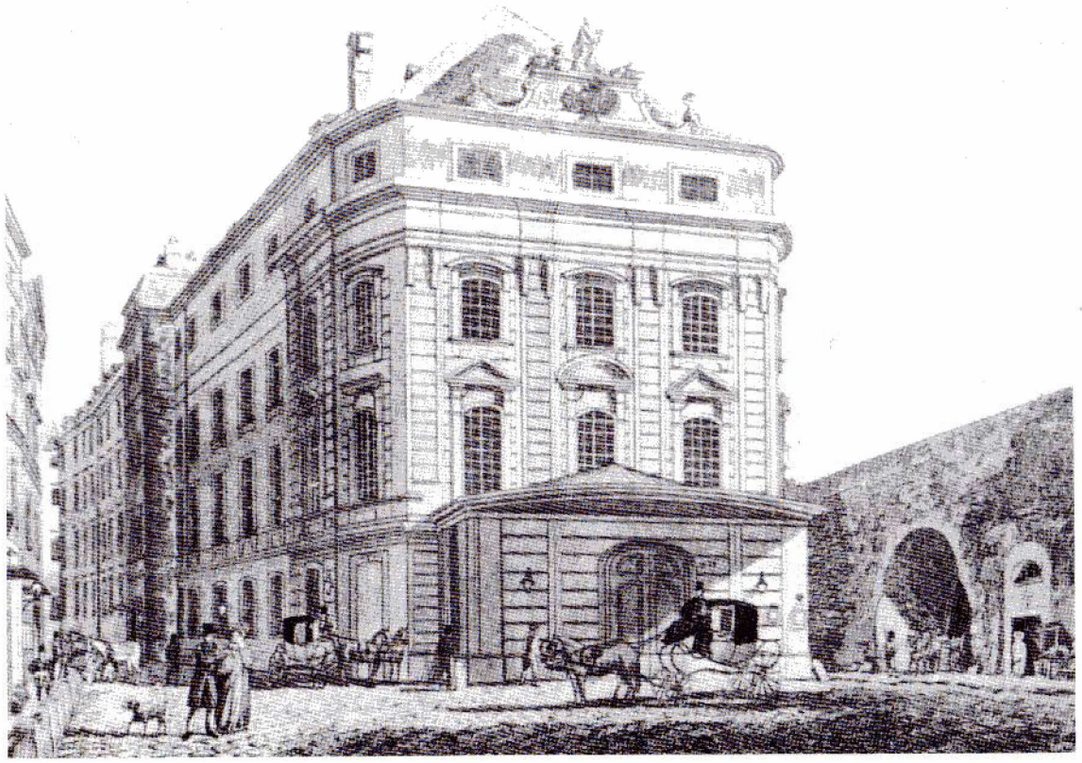
相川久仁子
赤尾ひとみ
浅井靖子
荒木恵子
石崎敬子
伊豆野留美
糸山由夏
稲岡福子
今村隆子
牛島久美子
江口多美
江藤洋子
大代あき
大谷美貴
岡山浩子
緒方一恵
緒方朋子
荻　尚子
小田誠子
小畑典子
兼田美穂
河野和子
河野洋子
菅　千佳子
北薗里美
工藤えり子
工藤たみ子
蔵元聖子
蔵元由美子
坂田わか子
相良香澄
相良香代子
嶋田知枝
園部真理子
谷口登紀子
塚本真弓子
虎口淑子
中尾郁子
中島清美
中島由美子
中島優美子
中山裕恵
西中和子
野田恭代
野月ますみ
橋本志津子
長谷川茉る子
林田奈津子
馬場圭子
平野淑子
広畑久美
福田ともこ
福田美香
福田睦子
本田　兌
前田深雪
前田弥生
正木尚子
松石弘子
松岡　愛
松門寺阿古
松村紀子
松本敬子
松本喬子
松本由紀子
丸田裕子
宮本恵子
村木イチ子
棟居泰子
米ヶ田敦子
毛利敏子
森武そのみ
矢野保子
山本紗百利
山本京子
吉田理恵子
横田味詠子
市之瀬千鶴
今村友美
岩尾美佳
植尾一子
上野典子
牛島由幾
江崎恭子
大井晴代
大久保庸子
大隅由紀子
小田順子
小山チエ
甲斐美絵
甲斐美紀子
鹿志毛恵子
桂　洋子
金澤久美
金子美沙子
蒲野律子
河北　恵
城戸祐子
木原美智代
木村さとみ
木村洋子
清原幸子
吉良圭子
草刈登喜代
久保久希子
久保久美子
古閑裕美
小林由佳
酒井智子
坂本峯子
佐々木亨江
佐藤ゆかり
沢畑照子
柴田道子
鈴木智加子
杉本弘子
高尾ゆり
高田順子
高比良栄子
高浜令子
田上治美
竹下敬子
竹田綾子
田中千勇子
棚平浩美
谷口彩子
玉井了子
千葉美智子
塚本和子
鶴田千恵
徳永玲子
中川明子
中村真由美
中村三紀
中村美千子
長尾恭子
中山八重子
西田久子
西田美智子
西村　幸
額田亜由美
橋口泰子
濱島小夜子
濱田敏子
林　和美
早野明子
原　一美
原　美恵
原田知枝
馬場美也子
平井実子
平井裕子
平嶋かずこ
平田得子
広兼隆枝
福島誉子
福山倫子
藤澤綾子
藤原美智子
古谷道子
牧　礼子
正木恒子
松下佐登子
松田富美子
松村恵美子
松本節子
松本美知代
松山典子
豆塚亜紀子
丸山直美
南　留美子
宮崎愛子
村上　薫
村上裕子
村田アキヨ
本岩喜世子
森　幸子
安田昭子
山内洋子
山本淳子
山本大子
柚井洋美
吉形美代子
吉村寿子
渡辺典子

Tenor
〈テノール〉

石原　明
稲田正雄
岩崎正博
上田博隆
内田卓男
江原道義
大野昭雄
萩　昂
小山健一郎
柏木申也
柏野勝宏
蟹江礼一郎
古閑裕規
小塚基夫
潮崎真一
下林　豊
仕吉　裕
瀬戸致誠
仙波洋八
拓植治人
田尻雅裕
千葉昌秋
津崎一則
土森武友
辻　輝夫
西海真樹
西口明弘
橋本健一
本田博久
松岡文治
松尾　真
松下　衛
松嶋義彦
宮川清秀
森　佳寛
吉原道彦
米田早利
渡辺至誠

Bass
〈バス〉

赤塚恒幸
赤星和幸
生森　隆
池田義弘
石村幸二
一甲宜男
井尾謙介
内田英一
衛藤純一
神田一伸
菊池健朗
北野英夫
清原直行
草刈秀克
草刈秀士
小濱田博幸
四季正次
嶋田英典
白石和男
新垣盛亨
高木幹史
高橋章夫
竹川博之
谷山俊彦
田畑　亨
坪倉貴之
徳丸真一
中嶋末光
中山　健
西井利嗣
西本一成
橋本新十郎
濱田耕一
林田興文
春田信親
東　旭
東　玄彦
広畑晶一
藤掛哲夫
本多智毅
前川賢夫
松島和寿
松元逸郎
松本和人
松本津紀雄
松本正昭
宮井　昭
棟居秀信
米村甲矢夫
笠　肇



「第九」の初演が行われたケルントナートーア劇場

熊本交響楽団
KUMAMOTO SYMPHONY ORCHESTRA

〈コンサートマスター〉
山崎崇伸

〈1stヴァイオリン〉
池田淳子
上田萬二
内田衣伊子
桂　敦子
古閑文子
龍野珠美
黒葛原契子
黒葛原康子
鶴　和美
鶴　千春
長坂浩子
原　雅子
藤本佳澄
フンペルト・ゴンザレス
山崎崇伸
吉田和子

〈2ndヴァイオリン〉
井上朋子
岩下　史
上野暢子
岡　純子
交野雅代
清田みずほ
小柳敦子
篠原恵理子
陶山典明
高木信雄
黒葛原洋子
長野衣理子
幟川明子
東　眞知子
松岡千平
松崎浩二
柚原三弥子

〈ヴィオラ〉
阿部和歌葉
池辺京子
緒方　肇
北澤孝治
清元　晃
国府慶作
甲田啓子
酒匂紀子
辰野陽子
黒葛原　潔
徳永義治
野尻　晃
毎床一寿
水田　剛
吉田美智子
鷲山法雲

〈チェロ〉
石垣博志
片山玲子
高木成子
高浜秀光
槌田博文
長尾和治
長坂輝喜
野島秀司
林　雅彦
佛淵かつよ
佛淵信夫
本田義信
松永尚子
三浦純子
水原真純
宮崎すみれ

〈コントラバス〉
東　康二
尾ノ下由香
国米　稔
坂田英津子
坂田拓司
田上博子
歳田和彦
中川裕司
平川和秀
遊川伊知郎

〈フルート ピッコロ〉
竹原千恵
田中里奈
高橋美穂子
外岡紀子
野間美奈子

〈オーボエ〉
片岡久哉
釘沢秀雄
辰野裕昭
宮本千草

〈クラリネット〉
黒木健次
高野栄次
府高明子
前野美千代

〈ファゴット コントラファゴット〉
高木群之
小林太郎
蓮沼　昇
星出和裕

〈ホルン〉
奥羽秀一
高橋　毅
田中禎子
外村真美子
松森　和
安松真司

〈トランペット〉
上村佳朗
中野真一郎
堀江幸司
吉野浩一

〈トロンボーン〉
書川欣也
寺本昌弘
田北洋康

〈打楽器〉
小野上真樹
白尾友宏
早川武志
福島　好

熊本県民第九の会演奏会記録
※は同時演奏曲

第1回　昭和57年12月28日(火)
指揮　山田一雄
独唱　新　圭子　木村宏子　伊津野修　高橋修一
※越天楽(雅楽)……近衛秀麿(編曲)

第2回　昭和58年12月11日(日)
指揮　大友直人
独唱　高見久美子　岡ますみ　大野光彦　柴田啓介
※歌劇「ニュルンベルグのマイスタージンガー」前奏曲……ワーグナー

第3回　昭和59年12月27日(木)
指揮　山岡重信
独唱　中沢　桂　木村宏子　板橋　勝　池田直樹
※弦楽のためのアダージョ　作品11……バーバー

第4回　昭和60年12月25日(水)
指揮　フランティシェック・ワイナール
独唱　三縄みどり　妻鳥純子　伊達英二　中村邦男
※「レオノーレ」序曲第3番　作品72……ベートーヴェン

第5回　昭和61年12月27日(火)
指揮　荒谷俊治
独唱　津下美奈子　木村宏子　鈴木寛一　芳野靖夫
※トッカータとフーガ　二短調……バッハ～ストコフスキー

第6回　昭和62年12月26日(土)
指揮　安永武一郎
独唱　中沢　桂　木村宏子　近藤伸政　栗林義信
※「エグモント」序曲　作品84……ベートーヴェン

第7回　昭和63年12月25日(日)
指揮　安永武一郎
独唱　三縄みどり　木村宏子　鈴木寛一　平野忠彦
※「コリオラン」序曲ハ短調　作品62……ベートーヴェン

第8回　平成元年12月24日(日)
指揮　小松一彦
独唱　秋山恵美子　木村宏子　成田勝美　高橋啓三
※「プロメテウスの創造物」序曲　作品43……ベートーヴェン

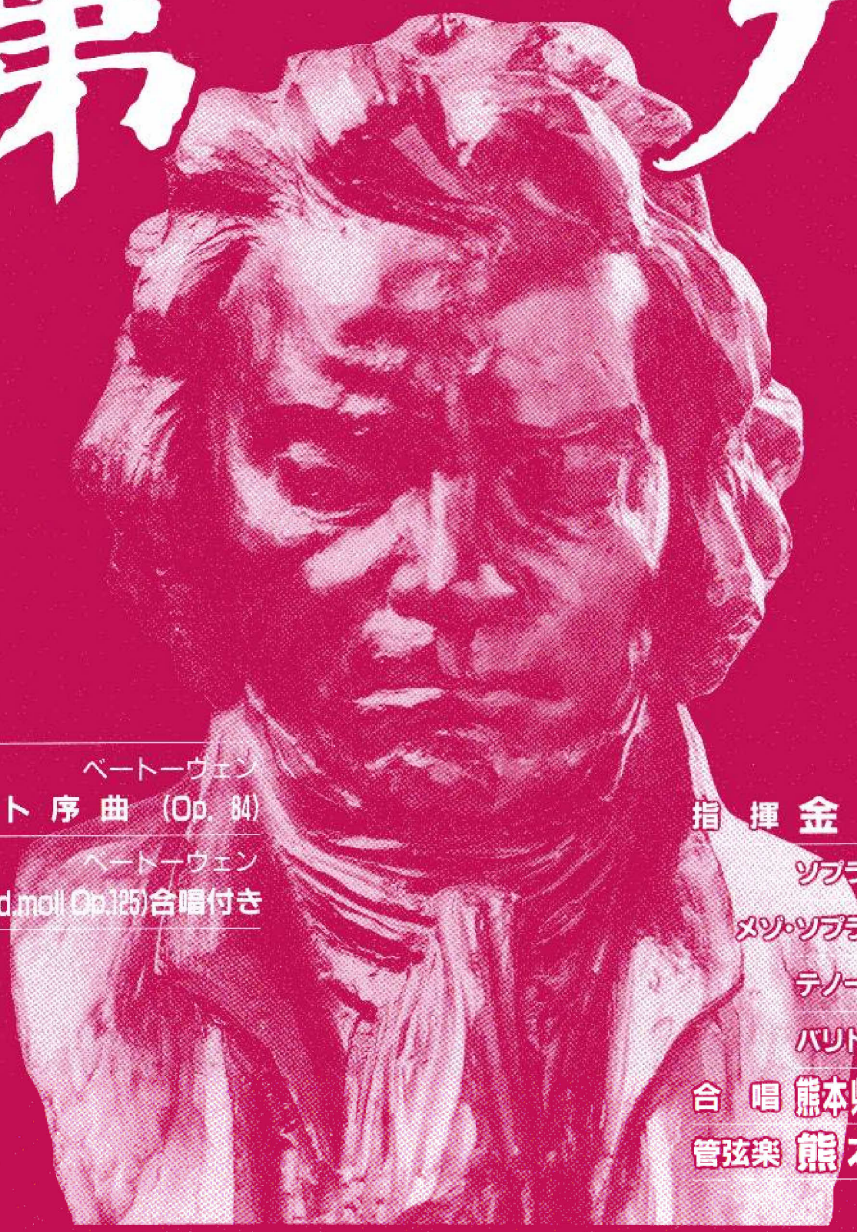
第9回　平成2年12月23日(日)
指揮　籾山和明
独唱　山田綾子　木村宏子　大野徹也　福島明也
※「ロザムンデ」序曲　作品26　D797……シューベルト

第10回　平成3年12月23日(月)
指揮　安永武一郎
独唱　西森由美　木村宏子　田中　誠　宮原昭吾
※「エグモント」序曲　作品84……ベートーヴェン

第11回　平成5年12月23日(木)
指揮　荒谷俊治
独唱　河添富士子　春日成子　小林彰英　栗林義信
※歌劇「ニュルンベングのマイスタージンガー」前奏曲……ワーグナー

第36回
熊本県芸術祭参加
（第12回）

ベートーヴェン
第九



曲目

ベートーヴェン
エグモント序曲（Op. 84）

ベートーヴェン
交響曲第九番(d.moll Op.125)合唱付き

S（指定席） 3,000円
A（指定席 1・2階） 2,500円
B（自由席3階） 2,000円

指揮 金 洪才
ソプラノ 岩永 圭子
メゾ・ソプラノ 妻鳥 純子
テノール 饗場 知昭
バリトン 勝部 太
合唱 熊本県民第九の会合唱団
管弦楽 熊本交響楽団

12/25(日)午後6時30分開演
熊本県立劇場コンサートホール

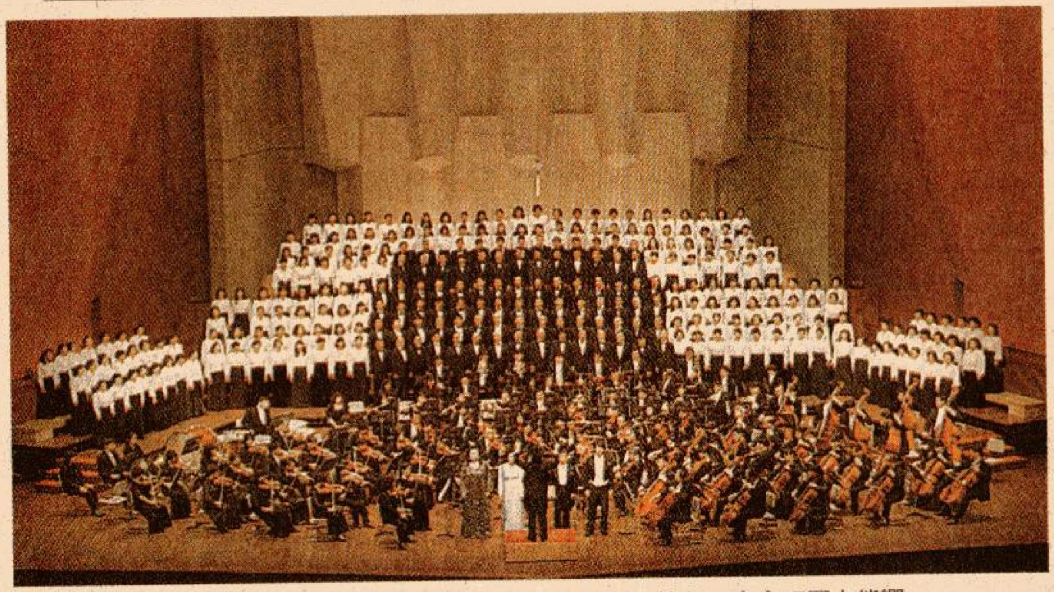
■主催/熊本県民第九の会・熊本県文化協会 ■助成/熊本県・(財)熊本県立劇場
■入場券は、11月13日より県立劇場および市内各プレイガイドにて発売します。
（KNサービス・熊本交通センター・大谷楽器・西野楽器・熊本県立劇場）
■お問い合わせ先/熊本県民第九の会事務局 ☎096(345)7285

熊本日日新聞　平成6年(1994年)12月26日　月

総勢400人「歓喜の調べ」

県立劇場

『第九』力強く



交響曲第九番第四楽章を高らかに響かせる県民第九の会合唱団と熊響、ソリストたち＝県立劇場

年の瀬恒例のベートーベン「第九」演奏会が二十五日夜、熊本市大江の県立劇場で開かれた。県民第九の会・県文化協会主催。

「第九」は正式には「交響曲第九番二短調『合唱』付き」。熊本では同劇場の完成を記念して昭和五十七年に始まり、今回で十二回目。県内の十五歳の女子高校生から八十五歳の男性まで、一般公募の合唱団約三百人と熊本交響楽団の百人が八月下旬から練習を重ねてきた。

指揮者に東京シティ・フィル、名古屋フィルハーモニー交響楽団などを歴任した金洪才（キムホンジェ）氏、ソリストには地元出身のソプラノ歌手岩永圭子さんをはじめ、いずれも二期会会員の妻鳥純子さん（メゾソプラノ）、饗庭知昭氏（テノール）、勝部太氏（バリトン）の四人を招いた。

熊響によるベートーベン「エグモント」序曲で開幕。「第九」の第一、第二楽章の演奏のあと、ソリスト四人と合唱団が入場。第三楽章を経て、ソリスト、合唱団が参加する第四楽章の「歓喜の調べ」で演奏はクライマックスに達した。

苦しかった練習、今年一年の思い出、来る年への期待などが交錯するなか、力強く伸びやかな歌声が会場を包み、聴衆から盛んな拍手が送られた。アンコールで「蛍の光」が演奏され行く年を惜しんだ。

本番に向け熱の入った練習をする人たち
＝熊本市大江2丁目の県立劇場

師走の夜に「第九」の歌声

県立劇場 県民の会があす演奏会

県立劇場の完成記念演奏会を皮切りに始まった、県民第九の会の「ベートーベン第九」演奏会が二十五日午後六時半から熊本市大江二丁目の同劇場で開かれる。二十三日、合唱団の合同練習があった。毎年一般公募で編成するアマチュア合唱団が特徴で、今年で十二回目を数える。これまでに延べ三千人が出演した。今や、年末の恒例コンサートの観がある。

由来は定かではないが、いつの間にか「年末は第九」は全国的に定着。十二月に入ると、各地で「歓喜の歌」のメロディーが流れ始める。県民第九の会の下田宰城実行委員長は「外国から見れば奇異に思うかもしれませんが、正月に向かう日本人の気持ちの高まりが、『第九』のメロディーとマッチしているのかもしれませんね」。

「第九」はキーが高く、合唱曲としては難曲。にもかかわらず、今年も未経験者六十五人が初舞台を踏む。やみつきになり、毎年

熊本日日新聞　平成6年(1994年)12月26日　月曜日

総勢400人「歓喜の調べ」

県立劇場

『第九』力強く

交響曲第九番第四楽章を高らかに響かせる県民第九の会合唱団と熊響、ソリストたち＝県立劇場

年の瀬恒例のベートーベン「第九」演奏会が二十五日夜、熊本市大江の県立劇場で開かれた。県民第九の会・県文化協会主催。

「第九」は正式には「交響曲第九番二短調『合唱』付き」。熊本では同劇場の完成を記念して昭和五十七年に始まり、今回で十二回目。県内の十五歳の女子高校生から八十五歳の男性まで、一般公募の合唱団約三百人と熊本交響楽団の百人が八月下旬から練習を重ねてきた。

指揮者に東京シティ・フィル、名古屋フィルハーモニー交響楽団などを歴任した金洪才（キムホンジェ）氏、ソリストには地元出身のソプラノ歌手岩永圭子さんをはじめ、いずれも二期会会員の妻鳥純子さん（メゾソプラノ）、饗庭知昭氏（テノール）、勝部太氏（バリトン）の四人を招いた。

熊響によるベートーベン「エグモント」序曲で開幕。「第九」の第一、第二楽章の演奏のあと、ソリスト四人と合唱団が入場。第三楽章を経て、ソリスト、合唱団が参加する第四楽章の「歓喜の調べ」で演奏はクライマックスに達した。

苦しかった練習、今年一年の思い出、来る年への期待などが交錯するなか、力強く伸びやかな歌声が会場を包み、聴衆から盛んな拍手が送られた。アンコールで「蛍の光」が演奏され行く年を惜しんだ。

本番に向け熱の入った練習をする人たち＝熊本市大江2丁目の県立劇場

師走の夜に「第九」の歌声

県立劇場　県民の会があす演奏会

県立劇場の完成記念演奏会を皮切りに始まった、県民第九の会の「ベートーベン第九」演奏会が二十五日午後六時半から熊本市大江二丁目の同劇場で開かれる。二十三日、合唱団の合同練習があった。毎年一般公募で編成するアマチュア合唱団が特徴で、今年で十二回目を数える。これまでに延べ三千人が出演した。今や、年末の恒例コンサートの観がある。

由来は定かではないが、いつの間にか「年末は第九」は全国的に定着。十二月に入ると、各地で「歓喜の歌」のメロディーが流れ始める。県民第九の会の下田宰城実行委員長は「外国から見れば奇異に思うかもしれませんが、正月に向かう日本人の気持ちの高まりが、『第九』のメロディーとマッチしているのかもしれませんね」。

「第九」はキーが高く、合唱曲としては難曲。にもかかわらず、今年も未経験者六十五人が初舞台を踏む。やみつきになり、毎年応募する人もいる。「普通の音楽にはない迫力、エネルギーが第九の魅力」と言う熊本市の田畑亨さん(四八)は、今年が四回目の出演。「できたら年中行事にしたいですね」。二百八十人の大合唱が、今年も師走の夜に響き渡る。